

# 人権なら

2018年10月1日

第94号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## 差別との向き合い方を探る

### 第10回奈良県「差別と人権」研究集会で

第10回奈良県「差別と人権」研究集会が9月1日、田原本青垣生涯学習センターで開かれた＝写真。県内外から多くの人たちが参加。部落解放研究集会から名称変更して10年目を迎え、これまでの経過と意義を確認。「差別をどうとらえるか」「どう向き合い、考えていけば良いのか」を議論し合った。



古川友則・実行委員長が主催者あいさつ。榊田斉志・県くらし創造部部長と、森章浩・磯城郡町村会会長(田原本町長)が、それぞれ来ひんあいさつした。

香川明英・事務局長が基調提案。格差が拡大し、民主主義をも脅かしている。排外主義も強まり、社会の分断が進む。安倍政治は私たちの障壁になっている。このことを視野に活発な論議を、と呼びかけた。

### 藤田敬一さんが記念講演「部落・人権・人間」

記念講演は藤田敬一・岐阜県人権懇話会会長(写真)が「部落・人権・人間一わたしが歩いてきた道」の題で話。藤田さんは部落問題との出会いや、木村京太郎、朝田善之助、米田富らとの交流を通して、現場の大切さや解放理論を学んできたことを語った。



特措法は多くの成果を上げてきたが、未だにマイナスイメージが残る。寝た子よりも、人の心を起こさないといけない。門(かんぬき)の架かった扉を開けないと。心を開いて語り合うことだ。「べきである」「ねばならぬ

の話では肩が凝る。身近な所から深く感じ、広く考える。他人と向き合い、互いに実感できることを求めて、生き合えるようにしたい、と話した。

### 「共同の営み」を通して差別・偏見の克服を

午後は2つの分科会。第1分科会「サポートと共生」は「差別をどうとらえるか」がテーマ。藤田さんがコーディネーターを務め、パネリスト2人が問題提起した。

石元清英・関西大学教授は「いま部落問題の何が問題なのか」と問い、自身が教える学生の部落観や、学生が受けてきた人権教育の認識にはリアリティがない。部落の存在が



見えにくくなっている、と指摘。山下力・当法人顧問は「部落解放運動を次のステージに移すために」として、運動の到達点と課題を示し、「共同の営み」を通して差別や偏見を克服していく、と提起。論議した。

### 差別の捉え方や「女人禁制」をめぐって論議

第2分科会「地域共同体と共生」(写真)は「ジェンダーと人権」-「女人禁制」・セクハラ、どちらも差別、がテーマ。大林美亀・奈良女性史研究会代表がコーディネーターを務め、パネリスト2人が問題提起した。

畑三千代・「大峰山女人禁制」の開放を求める会共同代表は「『女人禁制』は悪しき慣習だ」とし、日本相撲協会の「伝統」を盾に女性差別でないとする対応を批判。松村徳子・デートDV防止教育ファシリテーターは「性暴力を許さない社会をつくる」として、被害への告発、MeTooと言える社会を、と提起。議論した。

分科会のあと、全体会を再開。まとめを行った。

## 「いきサポ・ジェンダー劇場」開演

### 三宅町人権学習講座で話と劇を披露

第2回三宅町「人権学習講座」を8月3日にあった。

「いきサポ座」のメンバー7人が「いきサポ・ジェンダー劇場」と題して、話と劇を披露した＝写真。



「いきサポ座」は奈良県女性センターの「男女共同参画いきいきサポーター養成講座」で一緒に学んだ仲間たちが2011年に結成。講座で学んだことを「発信」していこうと、活動している。

財務省官僚の「セクハラ事件」や、閣僚の「擁護発言」など、話題になったさまざまな出来事を紹介。笑いを交えつつ、それらの問題点を指摘した。また、世界中に広がった「#Me Too運動」なども取り上げて、「日本ではどうして広まらないのか」と、問い掛けた。



続いて、ジェンダー(身体による性差とは異なり、歴史的、社会的、文化的に作られた性差のこと)をテーマに「戦争と女性」を考えると、戦時中の小さいころの思い出を振り返りながらの話をした。

### 「それはセクハラ! アウト! です」

このあと、「いきサポ・ジェンダー劇場」が開演。テーマは「セクハラ編 それはセクハラアウトです」が始まった。劇の舞台は職場の同僚女性たちの食事会だ。職場の上司からの「対応」や、先輩男子職員からの「まだ結婚はしないの?」「子供産まないの?」など、日々の職場での「それは、セクハラ! アウト!」を演じた。

脚本や小道具などは、すべてみんなで作りました。

重たいテーマが軽やかに語られ、演じられ、いろいろと教えられることが多かった。

\*\*\*\*\*

## 性暴力被害者への支援

### 原田薫・ウィメンズセンター大阪代表が提起

奈良県女性相談機関研修会が8月9日、県女性センターであった。本法人からも3人が出席した。

この日は「性暴力被害者支援を考える」が研修テーマ。講師は性暴力救援センター・大阪SACHICO運営委員、ウィメンズセンター大阪代表の原田薫さん。

第1講は「性暴力支援センターの機能と役割、性暴力被害の実態からみえてくること」。第2講は「二次被害を与えない対応の基本、支援員としてのスタンス」。4時間にわたって提起を受けた。

第1講で原田さんは、2010年に日本で最初のワンストップの性暴力被害者の支援のためのセンターを開設し、いろいろな支援の取り組みを進めてきたという。その性暴力救援センターが生まれた歴史的背景を説明し、性暴力救援センターは直近の被害から中・長期に向け、当事者の視点に立った総合的、包括的支援の支援ができる拠点であること。被害者への総合的、包括的な支援としては、こころのケア・からだのケア・生活面の支援が必要であること、などを話した。

### 性に対する迷信、偏見、思い込みに縛られず

第2講では、「二次被害」や、被害者の「自己決定」の大切さを述べるとともに、性に対する「迷信や偏見、思い込み」に多くの人が縛られていることを指摘。それにかからめとられないように、独立した認識を明確に持つことの大切さを強調した。

性暴力被害者に対する適切な支援とは「二次被害」を与えないことだとして、支援における基本的スタンスや、支援員の役割を説明。支援者としての自分のクライシス(危機)の状態を理解し、自分のストレスのサインに気付き、支援を継続するために、自分の日常を大切に(支援と日常の切り離し)ことを提起した。

## 鈴木常勝さんが「紙芝居」上演

### 河合町人権学習講座で「国策紙芝居」を

河合町「人権学習講座」が9月14日、「豆山の里」であった＝写真。

今年度初めての講座のテーマは『紙芝居は楽しいぞー戦争翼賛時代の「国策」紙芝居』。講師は鈴木常勝さん。



河合町生涯学習課の桐原麻以子さんが「人権をテーマにお話が聞けることを楽しみにしています。学び、楽しむ機会にしてください」と主催者あいさつ。

「街頭紙芝居の誕生」は1930年頃、街頭でアメ売りの客集めとして始まった。その後、子どもに教育的な物を、と「教育紙芝居」が作成された。それが1937年（日中戦争）頃から、「軍国主義教育」を背景に戦争推進の「国策紙芝居」に向かったという。

戦後、アメリカ占領軍（GHQ）の下、禁止される。1950年前後からは、失業者の日銭かせぎとして都市を中心に大流行。高度経済成長、1960年以降のテレビの普及とともに、街頭紙芝居は姿を消していった。

鈴木さんは20代半ばで仕事の傍ら、「そんな世界に飛び込」む。大学講師をしながら、今も週末は大阪・東住吉区の長居公園や住吉公園に通っている。

### 「チョンちゃん」、「ガンバレコスズメ」を演じる

鈴木さんは街頭での子どもたちとの「掛け合い」も紹介しながら、「チョンちゃん」を演じた。声の張りや表情などに楽しさが伝わる。参加者に「水あめやミルクせんべい」を振る舞うと、懐かしそうに、みんなの笑顔がこぼれた。



続いて、鈴木さんが若い頃、街頭で行っていた紙芝居のTV取材・インタビューを紹介したあと、「国策紙芝居・ガンバレコスズメ」(写真)を上演。この紙芝居

は麦畑に餌を食べに行く相談をし合う子ズメたちの話を聞いた母ズメが「麦畑を一人で守っている五郎さんのお父さんは、寒い北の国へお国のために戦争に行っている。南の焼けるような暑い国でも、たくさんの兵隊さんが…」と諭す所から始まる。

次は、ハトさんの出征を祝う場面。そこに、遠く南の島から祝いに駆けつけたツバメのおじさんが登場する。おじさんは南の国で見てきたうれしい話をする。「どの国でも、どの島にも日の丸が翻っている」「屈強な日本の兵隊さんが番をされていて、皆さん楽しそうに暮らしています」。海を飛んでいたある日、「多くのアメリカの船



が幾艘もいっぱい兵隊を乗せて攻め込んできたのです。しかし、心配はいりません。「日本の荒鷲(あらわし・飛行機)が迎え撃ち、やつけてしまいました」。

鈴木さんは、この紙芝居が1943年に作られ、「教員か町内会の役員が演じること」との通達が出たことや、講義で観せた学生の感想を紹介。国策紙芝居には、「人々や兵隊が死んでいく姿が描かれていない」ことに怖さを感じる、と語った。

\*\*\*\*\*

## ドキュ映画「あい」を上映

### 舞台は精神障害を抱えた人たちの「藍染」工房

ドキュメント映画「あい」の上映会が9月22日、奈良市中部公民館であった。障害者差別をなくす条例推進委員会が主催した。

舞台は精神障害を抱える人たちの事業所「藍染」工房。そこで作業する人たちの日常を描いている。上映会には、監督の宮崎信恵さんや、出演したナカジマアユミさんが顔を見せた。奈良で



活動する当事者たちとのトークも行った。「これからの夢」を語り合う笑顔が素敵だった。主題歌「巡りゆくときをこえて」はアユミさんが作詞した。こちらもお勧め。

## 韓国人遺家族を迎えて集会

### 天理・柳本飛行場の建設に強制連行され死亡

「天理柳本で亡くなった韓国人遺家族を迎えて」と題した市民集会が8月15日にあった。天理・柳本飛行場跡の説明板撤去について考える会が主催した。

まず、高野真幸さんが「柳本飛行場」について説明。大和海軍航空隊大和基地(通称・柳本飛行場)建設

は1943年秋頃から始まった。工事は川の付け替えや神社・寺・墓地・ため池・農地などの廃棄や移転を

伴い、4本の滑走路が作られた。この建設に関わった朝鮮人労働者は、日本に住んでいた家族連れの人たちや、朝鮮で徴用(強制連行)された人たちなど、3000人とも1000人とも言われるが、記録はない。

飛行場建設は「本土決戦」を想定し進められた。「米軍が最も上陸しにくい場所に拠点を置く」として、陸軍は八尾飛行場、海軍は柳本飛行場を造った。天



皇の「御座所」用のトンネルも天理に掘った。柳本駅西側の海軍施設部には「慰安所」が設置され、朝鮮人「慰安婦」が連れてこられた。高野さんは周辺に残る「戦争の痕跡」なども資料紹介した。

このあと、川瀬俊治さんが経過と遺家族を紹介。柳本飛行場に関わる強制連行被害者3人のうちの1人の遺家族が韓国江原道鉄原に在住していることが今年、判明。1991年に専行院の過去帳に記載されていたことが分かってから、27年経つ、と話した。

### 遺家族の金成嬉さんが来日して証言

金成嬉(キム・ソンヒ)さんは金海永さんと鄭長春さんの長女として1945年4月26日、江原道春川で生まれた。生後3日目の4月29日、父親は「強制連行」された柳本飛行場で死亡。専行院の過去帳には、施主「大阪海軍施設部」との記載がある。



金成嬉さんは、父が日本で死んだと母から聞いた。信じられなかった。今回、日本に来たくなかった。昨日、寺の過去帳で父の死を確認した。父の魂があるなら、父に連れて行ってほしいと願った。大きな土地を持っていたが、植民地時代に取りられた。父は勉強ができたので、「軍属」として日本に連行された。悔しくて仕方がない。朝鮮戦争の頃は、母方の祖父母に背負われ、避難した。戦火で戸籍簿が焼失し、中学への進学も叶わなかった。とても貧しく、大変苦労した、などと証言した=写真。通訳は松田暢裕さんが務めた。

金成嬉さんの絞り出すような言葉と、その表情に向き合って、会場は緊張に包まれた。

### 編集後記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

北朝鮮と韓国の南北首脳会談が9月にあった。今年になって、すでに3回目だ。6月には、米朝首脳会談もあった。長年、分断対立状態が続いてきた朝鮮半島に平和の光明が差してきた。韓国では昨年、民衆のロウソク革命が朴槿恵政権を退陣に追い込み、文在寅政権を誕生させた。その後、文政権は北朝鮮への平和外交はもちろん、内政においても、日本とは真逆の政策を遂行。貧困の解消や非正規職の正規化などに取り組む。こうした政策を突き動かし、下支えしているのが、民衆の運動や労働者の闘いだ。それに比べて、日本の動きは心許ない。政府にも、私たちにも、だ。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/